

八月総評 立花開

縄文土器のように笑う母

たんころぶ

兵庫県

縄文土器には人面や土偶なども含まれる。けれど作中の「母」の表情は主体にとつて人の形さえ失ってしまったもののように感じる。心が人を離れ、目鼻や口が無機質な「土器」の模様のように。せめて笑っているのがわからないほうがよかったのに。

ふわふわのペニスにつめた

わたが飛ぶ

(あ、おれも飛ぶ)

台風が来る

大嶋 碧月

兵庫県

ふわふわのペニスとは…と立ち止まってしまった。「わた」を詰められたペニスはまるでぬいぐるみのようなだが、そこから更に綿毛のように飛び立っていくらしい。「おれ」は何かの集合体で綿毛のように解体され個々に散っていくものだった。

残るものだけほしい

ほしいものをなくしたい

なくすものがほしい

瀧瀬

彩恵

静岡県

ほしいものを我慢し続けていると、本当は何がほしいのかわからなくなる。何か特別になるものを、たったひとつと思えるものを、これより特別なものがあるかもしれない。…結果、ほしいものだらけになってしまった。畳みかけが上手い作品。

百円のぬいぐるみカゴを

過ぎ去る人を

過ぎ去る人を

過ぎ去る……

……

詩央えみる

大阪府

道中あったワゴンセールのカゴを横目に見る通行人の目線から始まり、乱雑に詰め込ま

れたぬいぐるみたちの視点へと切り替わる。三連点が長い時間をうまく表現しており、ただ悲しみと埃が降り積もっていくのが伝わる。どのぬいぐるみも選ばれず、数えきれない人を見送っていく。

流麗な筆致で遺る

孫だった頃のわたしの

歯形の短歌

花野 木春

東京都

今もこれからも「わたし」は「孫」であることには変わらないはずだけど、立場にはなぜか期限がある。自意識が立場を離れたあと記憶は曖昧になってしまふけれど、ずっと主体を「孫」だと思ってくれていた人が遺してくれた記憶のひとかけら。

たまごっち

オレンジジュースに落ちて死す

あの夏の日を忘れない

ちゃぽ

櫻川 佳子

愛媛県

たまごっちとは可愛いキャラクターデザインに反して子共にはあまりにも繊細な生き物だが、お墓を立ててすぐにまた一から育てることができる。しかし本体が壊れてしまったらそれは永遠の別れとなる。「死す」とはいかにも大げさだが、子供心には大事件だったのだろう。凡庸になりがちな「あの夏の日」が輝く面白さ。

人間と人形の間に粉末の誘惑

小林紅石

埼玉県

浴びてしまったら意志と関係なく変容させられてしまいそうな「粉末」。固形であったときはどのような姿だったのか、どのように粉末にされたのかなど想像が尽きない。私たち人間と人形の優劣性は、実はあまりないように思う。見る角度によって簡単に変わる儂いもの。

なにもしていない

賞味期限のみが

勝手に過去になっていく日々

橋口 諒介

東京都

生きていることはタスクに含まれない。本当はそれだけでいいはずなのだけれど。タスクを消化できなかった時間を無駄と思うことが自身を少しずつ削っていく。そして、いつの間にか過ぎる「賞味期限」のように自分の時間も知らぬ間に減っていく。

記憶を記録すると

記憶はシユワット

空の青に溶けて

二度と帰って来なかった

楠城 昇馬

東京都

「記憶」は鮮度があるうちに形を与えないと少しずつ他の記憶と混ざり輪郭をなくしていつてしまう。けれど、経由した何かの網目を通れないものは必ずあって、形を与えたその瞬間から記憶は純正さを失う。作中のように生き物として捉えるなら、そもそも自分のものはなかったのかも。どこかへ還っていった記憶。

夢をなぞって

扉を開けて

はるか未来で

釣りをする

井上 奈保 埼玉県

建物のようになっていく「夢」。色や手触りはどんなだろう。扉はきつとたくさんあり、開けた先に様々な未来の世界がある。幻想は詳細を語るより“前提”を創りあげてしまうのが良い。私たちが知らなかっただけで、夢の世界の果ても地球と同様に海に繋がっており、「はるか未来」は釣りをするところなのを作者だけが知っている。